

研究発表要旨

氏名： 上村明

氏名のローマ字表記： Kamimura, Akira

所属：東京外国語大学

専門分野：文化人類学

発表のタイトル：創造と模倣—モンゴル・ヒップホップの成り立ち—

発表要旨（600字～800字程度）：

「創造」と「模倣」の問題は、文化だけでなく学術研究においても重要な課題である。学術研究でも文化でも、既成創作物を保護する著作権と著作物を利用する権利は、ともに重要であるが、近年は著作権のみを重視する傾向がつよく見られる。その一方で、著作者自身が著作物の自由な再利用を一定の範囲で認めるクリエイティブ・コモンズの仕組みも広がっている。ヒップホップは、アメリカにおいて既成の曲の **remix** から生まれ、模倣と地域化の過程をへて世界に広がった音楽文化である。モンゴル・ヒップホップも、1990年代後半からアメリカ、ヨーロッパ、韓国、日本などの影響を受けながら、独自の発展をしてきた。本発表は、その成り立ちから現在の試みに至るまでをたどりながら、創造と模倣の視点からモンゴル・ヒップホップを考察する。

モンゴルでも、ヒップホップは **Remix** 文化として始まった。2Хүү の“Энэ бол Би”(2004) は **Dr. Dre** の“**Forgot About Dre**” (1999)のメロディーをほぼそのまま使っている。また、**Ice Top** の曲の中には、**2Pac** の曲のメロディーの一部やコード進行をそのまま使っている曲もある。重要なのは、これらギャングスタ・ラップの音楽的要素ともに、社会問題テーマもモンゴルに導入されたことである。ヒップホップは、1990年代からの厳しい経済・社会状況を描写する重要な手段となったのである。

2010年代、ホーミー歌手とラッパーが組んだエスニックな曲が数多く作られる一方で、民族主義的要素とは無関係な都市空間を表象する曲も作られる。著作権問題や新しい機材により、外国の曲を直接利用することは減った。そして現在は、ネット上のコモンズな音源が自由に利用できるようになるとともに、**youtube** 経由で最新の **New School** の音楽的またテーマの傾向を敏感に取り入れるようになった。